

# 『撫子の「百韻」の考察（一）』

伊藤 伸江

## はじめに

早大図書館蔵『撫子の「百韻」』は、専順、心敬、行助、宗祇らの有力連歌師が参加し、細川勝元とその家臣らが張行した百韻である。<sup>①</sup>連衆は勝元、専順、心敬、実中、通賢、行助、元説、宗祇、盛長、常安、宗怡、頼宣、光長。この百韻は孤本で、他の伝本は現在のところ管見に入らない。早大本には張行年次が記されておらず、成立時期は不明であるが、<sup>②</sup>参加した宗祇が文正元年（一四六六）の夏から秋にかけて、東国に下向しており、そこから少なくとも文正元年の夏以前の成立と推定できる。さらにこの百韻は、寛正五年（一四六四）三月に興行されたと推定される『熊野千句』<sup>③</sup>と多くの連衆が重なっており、『熊野千句』に近い時期の張行が推察される。また、発句に「梅雨」が詠まれており、陰暦五月の張行であろうことはいえる。そして、寛正四年（一四六三）五月から寛正五年五月にかけては、心敬の主著『ささめごと』の本・末が著されているが、その贈呈先に、細川管領家とその周辺が推定されていることもあり、<sup>④</sup>『撫子の「百韻」』は、細川家の文化圏と心敬との関わりの詳細を考える上で重要な百韻である。ここでは、まずこの百韻の連衆や、

その張行の特徴について以下に述べたい。

### 細川勝元と細川連歌圈

『撫子の』百韻』の発句を詠んでいる細川勝元は、永享二年（一四三〇）に管領細川持之の子として生まれ、父の死により十三歳で細川宗家を継ぎ、摂津・丹波・讃岐・土佐四カ国の守護を兼ねた。細川宗家は、代々右京大夫にのほり、京兆家と呼ばれる家柄であるが、細川一族には、その他に右馬頭をつとめる典厩家などがあり、計九カ国の守護をつとめる強い結束を誇った一族であった。勝元は文安二年（一四四五）に管領になり、以後三度、二十三年間にわたり管領をつとめ、幕府に大きな影響力を持った。山名宗全と争い応仁の乱を起こすが、乱途中の文明五年（一四七三）、山名宗全の死に続き、和議を待たず自らも四十四歳で急死した。

勝元は、和歌を学ぶことに熱心であり、冷泉派歌人正徹との交流が見られる。正徹は、文安三年（一四四六）頃より勝元の叔父にあたる細川道賢（細川右馬頭入道）邸の月次歌会にかかさず出席しはじめ、毎年道賢邸の桜見物をするなど道賢と親しく関係を持ちはじめていたが、宝徳元年（一四四九）閏十月十五日には、勝元の依頼で鷹百首の新作題を正徹から送っており（『草根集』六〇〇七詞書）、勝元がこの頃より正徹に非公式に指導を仰いでいた事が知られる。勝元は、宝徳二年（一四五〇）十一月には正徹に和歌の師匠を頼み（『草根集』六六一九詞書、『東野州聞書』宝徳二年十一月七日条）、正徹も承諾、彼は以後勝元邸の月次会に出席するようになった。正徹は道賢邸、勝元邸以外にも、細川頼久、氏久邸の和歌の催しに参加しており、細川一族と強い結びつきがあった。

また、勝元は二条派歌人堯孝も自邸の月次歌会に招いており、勝元が享徳三年（一四五四）八月四日に父持之の忌にあわせて勸進、奉納した『細川持之十三回忌品経和歌』<sup>6</sup>には、正徹、堯孝が参加している。また、長祿二年（一四五八）十月十六日に細川道賢が勸進した『細川満元三十三回忌品経和歌』<sup>7</sup>には、勝元も参加し法華経信解品を詠んでいるが、

この品経和歌にも正徹、また堯憲（堯孝は康正元年（一四五五）に死去）が参加している。正徹の後を継いだ正広も、享徳頃に勝元家の五十首探題和歌で当座に詠んだ二首が面目をほどこしたことを記しており（『松下集』六〇一詞書）、勝元邸に出入りを続けている。勝元は享徳二年に『飛鳥井雅世一回忌品経和歌』も勧進しており、道賢と並んで当代歌人と広く交流を持っている。心敬の『ささめごと』<sup>(8)</sup>で「さらさらしき会所所々に侍りしなり。公家には、一条太閤・飛鳥井家・冷泉両家、武家には、京兆亭・同典厩亭・、在々所々月次の会、当座褒貶などとして、さまざまの会席、数を知らず。」と述べられているごとく、勝元邸、道賢邸は都の歌人がつどう歌会の開催場所であった。

続いて、勝元の連歌の事蹟を見る。まず『新撰菟玖波集』には二句入集している。さらに例えば宝徳元年（二四四九）二月二十五日には、自邸にて五座一日千句を開催しており（『宗御連歌愚句』二四一詞書「同廿五日細川右京大夫勝元の家の五座一日千句に」）、これは北野天満宮に奉納する細川千句であった。すなわち彼は既に文安年間から、寛正初年にかけて毎年千句（細川千句）を北野天満宮に奉納し、宝徳二年以降毎年初卯連歌を石清水社で張行しており、連歌にも深く関わっていた。

勝元参加が現在判明する、『撫子の「百韻」』以外の連歌百韻を以下列挙してみる。

●寛正四年（一四六三）三月二十七日何船百韻「神松や」 発句行助、脇勝元、連歌師として専順、行助、賢盛が参加、家臣通賢、常安、頼宣らがあり、歌人として正広、正般、その他実中がいる。

●寛正四年六月二十三日唐何百韻「蟬のはの」 発句道賢、脇勝元、連歌師として心敬、行助、専順、紹永、家臣として通賢、常安、頼宣らが参加している。

●寛正五年十二月九日何路百韻「一とせに」 発句勝元、脇元説、連歌師として心敬、能阿、専順が参加、家臣として常安、頼宣らが参加している。

●寛正六年極月十四日何船百韻「鳥ねぶる」 発句勝元、連歌師として心敬、賢盛、専順、行助、宗祇、臣下として通賢、常安、頼宣、具忠、光信らが参加している。

●応仁二年一月二十八日山何百韻「花や星」発句桐（義政）、脇日、冷泉為広、飛鳥井雅親、勝元、連歌師として専順、行助、賢盛が参加している。

これらの現存する百韻から、百韻の張行のために参加させる連歌師は判明している限り、専順、行助、賢盛、能阿、心敬らであるが、心敬は、『所々返答第二状』<sup>10</sup>において、寛正六年春<sup>11</sup>に、管領畠山政長、前管領細川勝元の両者が同じ日に催した花見の会の連歌で、両方の発句を詠んだことを述べ、寛正五年九月以前に、管領勝元が自邸で連歌合の会をはじめたこと、そこには勝元の伯父道賢をはじめ、都の名手がつどったことを言い、自らが判の勝ち負けを決めたことを誇らしいこととして述べている。ここから、少なくとも連歌合の会の開始時期以来、勝元邸での連歌張行にあたっては心敬が宗匠としてつとめていることがわかる。『撫子の「百韻」』でも、脇を専順がつとめているが、第三、二折表第一句、三折表第一句、三折裏第一句、挙句は心敬が詠んでおり、折の変わりなどの重要な句を多く詠むところから、明らかに宗匠は心敬である。しかし、寛正から応仁にかけては、將軍足利義政主催の連歌会には能阿、行助、専順が招かれており、専順は宗御亡き後の都の連歌の第一人者であったと見られている。<sup>12</sup>現在判明する限り、義政の連歌会には心敬は招かれておらず、そこから推測しても、この時期の都の連歌師の序列としては専順が上であったのであろう。將軍の連歌会には出座していなくても、細川家関係の連歌の取り仕切りは、専順よりも心敬が手がけていたと考えられるから、<sup>14</sup>『撫子の「百韻」』では、心敬が同座する専順に配慮しつつ座を進行させていたのである。

なお、心敬は、寛正三年から四年五月にかけては紀州に赴き、また応仁元年に都を離れ東国に渡っている。応仁二年（一四六八）五月下旬成立の『専順百句付』（京大文学部国語国文学研究室蔵本）は、「藤京兆」が専順に「後学の用心なとにも」と所望したと述べる奥書があるが、この「藤京兆」は「藤」が不審とされつつも勝元の可能性が指摘される。<sup>15</sup>「藤」を誤写と見なして「藤京兆」を勝元と考えるならば、応仁二年は心敬が京都を離れた後のことであるから、心敬でなく専順に所望したということであろう。

『撫子の「百韻」』に参加した細川廷臣その他の連衆はどのような事蹟を残しているのであろうか。主だった者につき、

わかる範囲で述べておく。<sup>17)</sup>

第四句を詠んだ実中は、摂津国高槻の臨濟宗景瑞庵の住待である。先に見た『寛正四年三月二十七日何船百韻』に参加し、『寛正六年正月十六日何人百韻』を自坊にて開催している。第五句を詠んだ通賢は、越智氏で、『細川満元三十三回忌品経和歌』に参加している。第九句を詠む盛長は『熊野千句』を張行した安富民部丞盛長であり、文安句年(二四四九)までに十万句連歌を詠み北野天満宮に奉納している。<sup>18)</sup> その他の連衆では、常安は、大館氏で、『細川持之十三回忌品経和歌』『細川満元三十三回忌品経和歌』両作品を詠んでいる。頼宣は明智頼宣。実中以外の連衆は『熊野千句』の連衆でもあった。

## 百韻の様相

『撫子の「百韻」』の各連衆の句数を検討する。この百韻は唯一伝本で、破損箇所もあるため、伝本間、また句上と百韻本文間のつきあわせが不可能で、百韻内での句数との整合性を完全に確認することはできないが、句上に従えば、

勝元十二	元説七	光長一
専順十一	宗祇十	
心敬十三	盛長八	
実中六	常安六	
通賢七	頼宣六	
行助十一	宗怡二	

である。光長は執筆ゆえ一句のみの詠出で、その他の連衆は、例えば発句のみ勝元の句をいただくといった形ではなく、全員通して百韻に参加していた。

主たる連歌師の句数は心敬十三、専順十一、行助十一、宗祇十であった。句数は張行時点の連歌師の序列を示すものであるが、心敬と専順、行助がほぼ同一の句数であり、宗祇が少し減る。比較のため、以上四人が『熊野千句』の各百韻の連衆となった際の句数を見る<sup>19</sup>。目安として勝元の句数を括弧内に示す。

第一百韻	心敬十一	行助十	専順十	宗祇七	(勝元十)
第二百韻	心敬十一	行助十一	専順十	宗祇七	(勝元十)
第三百韻	心敬十	行助十	専順十	宗祇七	(勝元九)
第四百韻	心敬十一	行助八	専順十一	宗祇八	(勝元八)
第五百韻	心敬十	行助九	専順十	宗祇八	(勝元八)
第六百韻	心敬十二	行助九	専順十二	宗祇七	(勝元九)
第七百韻	心敬十一	行助八	専順十	宗祇七	(勝元九)
第八百韻	心敬十二	行助十	専順十二	宗祇八	(勝元七)
第九百韻	心敬十一	行助八	専順十二	宗祇八	(勝元十一)
第十百韻	心敬十一	行助十	専順九	宗祇八	(勝元九)

『熊野千句』では、第九百韻のみ、専順が心敬の句数を上回り、第一、第二、第七、第十百韻で心敬の句数が専順を上回る。その他は両者同数である。行助が少し下回り、宗祇がさらに減るといった傾向は『撫子の「百韻」』と同じである。

では、心敬と専順の、それぞれの百韻内での力関係はどのようであったのであろうか。両者の句が、百韻の内、発句、脇句、挙句、また折の変わり目といった重要な位置にあるかどうかを、『撫子の「百韻」』と『熊野千句』とで比較して見る。

『「撫子の」百韻』では次のようである(式目表参照)。

(発句勝元) 心敬…二折表第一句、三折表第一句、三折裏第一句、挙句

専順…脇

専順は、脇を詠んだ後は、心敬が各折の変わり目という特別な位置の句を多く担当しているのに対して、例えば二折表第二句、三折裏第二句などを詠み、むしろ心敬の句を展開させる役割をになう。この百韻では、専順よりも安富盛長が初折裏第十四句（初折裏末尾）、名残折表第一句を詠むのが目につき、連衆の中では、優れた力量を持つ作者として自己主張しているようである。

これに対して、『熊野千句』では次のようになった。

第一百韻（発句勝元） 心敬…第三、二折裏第一句、三折表第一句、名残折表第一句、名残折表第十四句（名残折表末尾）

専順…拳句

第二百韻（発句道賢） 心敬…二折表第十四句（二折表末尾）、名残折表第十四句（名残折表末尾）

専順…二折表第一句、二折裏第十四句（二折裏末尾）、三折裏第一句

第三百韻（発句盛長） 心敬…第九十九句

（興行者盛長が発句、二折表第一句、三折表第一句を詠む）

第四百韻（発句頼暉） 心敬…二折表第十四句（二折表末尾）、名残折裏第一句

専順…名残折表第十四句（名残折表末尾）

第五百韻（発句賢秀） 心敬…名残折表第一句

専順…第三、二折表第十四句（二折表末尾）、第九十九句

第六百韻（発句元綱） 心敬…初折裏第十四句（初折裏末尾）、三折表第十四句（三折表末尾）、名残折表第十四句（名

残折表末尾）、拳句

専順…二折表第十四句（二折表末尾）、名残折表第一句、第九十九句

第七百韻（発句行助） 心敬…二折裏第十四句（二折裏末尾）、名残折裏第一句

## 第八百韻（発句通賢）

専順…二折表第一句、三折裏第一句

心敬…脇、初折裏第十四句（末尾）、三折裏第一句、名残折裏第一句

専順…二折表第一句

## 第九百韻（発句専順）

心敬…初折表第八句（初折表末尾）

専順…発句、二折表第一句、二折裏第十四句（二折裏末尾）、名残折表第一句

## 第十百韻（発句心敬）

心敬…発句、二折裏第一句、挙句

専順…二折表第一句、名残折表第一句

心敬、専順は、第九、第十百韻のような、それぞれが発句を詠んで主導していく百韻の場合には、互いに相手を立てて地味に句を詠むことに徹しつつ、必要な際には他者の助けに入り百韻の流れを円滑にしている。このような作業を千句全体を通して両者共にしているが、全体としては心敬が多く重要な位置の句を詠んで百韻の流れを進めており、とりわけ第一百韻の勝元発句の一座を強く支えている。また、第十百韻で発句、挙句を詠み千句を閉じていることから、この千句では心敬が宗匠としての役割を果たしていると確認できる。専順は重要な連歌師として立てられつつ、少し軽い立場で心敬と共存しており、その点で『撫子の「百韻」と同じである。また、第三百韻における盛長の活躍ぶりも、彼が『撫子の「百韻」で重要な位置の句を詠むことと同様、連歌作者としての評価が高いことに起因しよう。盛長が『熊野法楽千句』の興行主であったということは、社会的・政治的な立場からの要因が大きいものであるが、十万句連歌を詠んだ事蹟からも知られるように、細川家臣の中では連歌に熱心であり句の水準が高い連歌作者という評価を得ていたのである。

また『熊野千句』では、三つの百韻で宗怡の出句数が一〜二句と少なくなり、彼の句数はまだ一定しない。だが、こうしたことも含め、概観した時に、『熊野千句』と『撫子の「百韻』とは、連歌師の立ち位置に関しては、ほぼ同じような傾向を示しているといえよう。



なお、この宗怡の句数に関しては、『寛正六年正月十六日何人百韻』、『寛正七年二月四日何人百韻』では、『撫子の百韻』よりもいずれも出句数が増加している。例えば、連衆数が十名の『寛正六年正月十六日何人百韻』での出句数は、心敬十六、専順十六、行助十三、宗祇十二、実中十、元輒九、大況八、幸綱八、宗怡七、公範一である。また、連衆数が十八名の『寛正七年二月四日何人百韻』での出句数は、心敬十一、行助十一、専順十、英仲四、元用六、弘仲三、宗祇六、量阿七、清林四、宗怡七、紹永六、士沅六、能通三、慶俊六、政泰二、与阿五、弘真三、常広一であった。心敬、専順、行助、宗祇の句数の相互関係は変わらないが、宗怡のみが増加している。宗怡は伝未詳であり、出句している百韻の現存数もわずかで比較しにくい。ここは年と共に句数が増えたものか。そうであるならば、『撫子の百韻』は、先学の推定通り寛正六年頃の張行の可能性が最も大きいと思われるが、寛正年間でも五年頃までの百韻という可能性も出てくるであろう。

### 一巡出句の特徴

それでは、『撫子の百韻』から看取される幾つの特徴を考える。十三名の連衆はまず一巡で句を出し合っていくが、この一巡の句はどのように作られたのであろうか。

詳細は『『撫子の百韻』訳注』で検討しているが、ここでは句の流れの創出に着目して考えたい。一巡の句の部立と出句者名は次のようになる(執筆光長は⑬番目に一句出している)。

- ①夏(勝元) ②夏(専順) ③夏(心敬) ④秋(月)(実中) ⑤秋・羈旅(通賢) ⑥秋・羈旅(行助) ⑦秋・羈旅(元説)  
 ⑧秋(宗祇) ⑨冬(盛長) ⑩恋(常安) ⑪恋・秋(宗怡) ⑫雑(頼宣)

発句の季節は夏であり、脇は発句を受け、第三から変化の兆しを見せていくが、第三までは季節を変えていない。第四

句からは秋の景物とされる「月」を詠み入れることで秋に移っている。その後、第八句まで秋が連続している（秋は最大五句まで連続できる）。第九句は冬、第十句は恋、第十一句は恋（秋の句意もある）、第十二句は雑であった（式目表参照）。

この句の進行を主たる連衆が重なる『熊野千句』の各百韻と比較してみよう。『熊野千句』は連衆が『撫子の』百韻より多いが、まず発句から第十二句までを比較してみることにする。

#### 第一百韻

①春（勝元）②春（盛長）③春（心敬）④春（道賢）⑤春（行助）⑥羈旅（頼暹）⑦秋・羈旅（賢秀）⑧秋（専順）⑨秋（常安）⑩秋（通賢）⑪秋（元説）⑫雑（宗祇）

#### 第二百韻

①春（道賢）②春（元綱）③春（勝元）④春（盛長）⑤春（心敬）⑥秋（月）（専順）⑦秋（行助）⑧秋（宗祇）⑨秋（頼暹）⑩秋（通賢）⑪雑（宗怡）⑫雑（常安）

#### 第三百韻

①春（盛長）②春（道賢）③春（賢秀）④春（勝元）⑤秋（月）（専順）⑥秋（心敬）⑦秋（常安）⑧秋（行助）⑨秋（宗祇）⑩冬（元綱）⑪冬（通賢）⑫冬（宗怡）

#### 第四百韻

①春（頼暹）②春（元次）③春（行助）④雑（心敬）⑤雑（勝元）⑥秋（月）（道賢）⑦秋（宗祇）⑧秋（通賢）⑨雑（盛長）⑩夏（宗怡）⑪夏（常安）⑫恋（賢秀）

#### 第五百韻

①春（賢秀）②春（元説）③冬（専順）④秋（月）（宗祇）⑤冬（道賢）⑥冬（行助）⑦雑（勝元）⑧雑（盛長）⑨秋（心敬）⑩秋（常安）⑪秋（宗怡）⑫雑（幸綱）

## 第六百韻

①春(元綱) ②春(通賢) ③夏(宗祇) ④秋(月) ⑤春(專順) ⑥秋(道賢) ⑦秋(勝元) ⑧秋(盛長) ⑨羈旅(行助) ⑩羈旅(元説) ⑪恋(心敬) ⑫恋(賢秀) ⑬雜(勝元)

## 第七百韻

①春(行助) ②春(常安) ③春(宗怡) ④冬(通賢) ⑤冬(盛長) ⑥冬(元説) ⑦雜(心敬) ⑧羈旅(專順) ⑨羈旅(勝元) ⑩雜(頼宣) ⑪雜(通賢) ⑫秋(元説)

## 第八百韻

①春(通賢) ②春(心敬) ③春(盛長) ④春(行助) ⑤春(宗祇) ⑥秋(宗怡) ⑦秋(月) ⑧羈旅(頼暹) ⑨秋(羈旅) ⑩安(盛長) ⑪雜(勝元) ⑫冬(專順) ⑬冬(賢秀)

## 第九百韻

①春(專順) ②春(頼宣) ③春(幸綱) ④羈旅(元説) ⑤秋(賢秀) ⑥秋(宗祇) ⑦秋(月) ⑧夏(常安) ⑨夏(心敬) ⑩雜(宗怡) ⑪春(元綱) ⑫春(行助)

## 第十百韻

①春(心敬) ②春(勝元) ③春(盛長) ④秋(月) ⑤羈旅(道賢) ⑥秋(通賢) ⑦秋(宗祇) ⑧秋(專順) ⑨秋(宗怡) ⑩冬(賢秀) ⑪冬(幸綱) ⑫冬(行助) ⑬雜(元綱)

『熊野千句』の各百韻の句の進行を見ると、発句の季節はすべて春であるが、その春の句がほぼ三句目もしくは五句目まで続き、情景に詠みこみやすい「月」を用いて「秋」に句を移し、そこから季を表わす語句のない「雜」「羈旅」へ、またはその他の季節へとという大きな傾向が読み取れよう。第二、第三、第八、第十百韻などがそうである。例えば第二百韻は、春が第五句まで、秋が第六句から五句続いた後、雑の句がつけられている。第三百韻は発句から春が四句続いたところで、専順が「月」を入れることで第五句を秋に変え、秋が五句続く展開になっている。第八百韻も春が五句

続き、秋へと展開し、第十百韻も、春が三句続いた後に、「月」を詠む秋（羈旅の意も同時に含む）の句が出され、秋が五句続いた後に冬へと至る。

春から秋という定番の進行をなさず、句の進行が変化している例としては、例えば第四百韻では、冒頭から春が三句続いたところで、連歌師（心敬）が雑の句とする。これはおそらく自分が春を続けてしまうと、次の句（勝元）では春から別の部立の句にスムーズに移れるような句は詠めないであろうこと、春が五句続くのは実は好ましくないと心敬自身は考えていたことからのリードであろう。第五百韻では、脇句が冬に近い初春の情景を詠む句であったため、第三（専順）で季節を冬に戻し、更に第四句（宗祇）で秋へといわば逆回りの形で季節を変えていこうとしたが、連衆はついてゆけず、第五句は冬に戻ってしまっている。第六百韻でも、脇句が夏の語句をも詠みこむ春の句であったので、第三（宗祇）は夏の句にし、続く第四句（専順）は秋にすすめ、第五句（道賢）、第六句（勝元）、第七句（盛長）と秋句ですすめさせ、通常の句の進行に戻している。第七百韻は、春の句三句の後、冬に季節を戻した句が出、それによって三句冬が続き、七句目に心敬が雑になして羈旅、雑と進んで行く。この百韻は一句のみの出句者が多く、そのため千句の中でも連衆が多い百韻になっており、全体として最も進行が乱れた百韻であるといえよう。

『撫子の「百韻」』でも、発句の季節「夏」が第三句まで続き、「月」を用いた第四句で「秋」の句となっていた。発句の季節が春秋の場合（最大五句まで続けられる）と、夏冬の場合（最大三句まで続けられる）とでは季の連続数が違ってくるが、連続の途切れる所から秋の句というのがオーソドックスな進行手順であり、『撫子の「百韻」』はそれを踏襲していると言いうことができよう。

ところで、『撫子の「百韻」』の十二句までの進行のうち、第四句と第五句

四 岩間の月にかかる白波 実中

五 露払ふ風に夢なき旅枕 通賢

は、付合に関係が見いだしにくい。水辺の情景の句に、旅の印象が強くなるようにして「露」で秋を保っている句が付けら

れており、前句の水辺の情景が生かされていない。前句に付けるだけならば、秋の二句目であるから、羈旅のイメージの語句は必要ない。ここはあらかじめ羈旅の句を予定して作ってあったためにその句の原形が「旅」に残ったのではないか。

このように考えた時、第六句と第七句の付合

六 床も定めぬ秋のかりふし 行助

七 衣うつかたを里かと分る野に 元説

では、行助の句は、羈旅のイメージをも持つ前句にスムーズに続けるために羈旅を意味する語句を入れ、かつ秋のイメージを強めるため「秋の」とあえて詠み込んだ感がある。練達の連歌師であるから、その場での句作はもちろん可能であり、通賢の句から付けていったのであろう。秋の三句目であるから、次からは別の部立に移ってもよく、雑か秋かまた別か等の複数の選択肢を次の句に与えてもいるが、次の元説の句は秋と羈旅の意を含んだままであった。

百韻を張行する場合、百韻の一巡の順番は、連衆の身分などから張行前に定まっていると考えられ、当然ながら各人は自らが何番目に出詠するかわかつているのであろう。とすれば、自分の番がくれば必ず句を出さねばならないのであるから、発句は勿論のこと、他の句を出句する場合も腹案を持ってその場に臨むであろう。自在にその場で句を作る事ができる連歌師ほどの技量を持たない細川家の臣下らは、長句短句の別もあり、なおさら自分の句のイメージを強く持つて場にのぞんでいると考えられる。その際、特に初折表までの八句は、発句の季がほぼ第三句まで続き、その次に別の季（『熊野千句』の例を見れば秋の可能性が高い）が五句まで続くであろうこと、さらに八句目までかそれ以降には羈旅の句も来るといふ経験則に従って、それぞれ句のイメージを作ったであろう。こうした理由から、第五句や第七句の付合の不整合は説明できよう。これらは、前句にきちんと付けて作ったのではなく、前々から作っていた自分の句を（その場で多少の手直しをしたかもしれないが）出したものであり、それゆえに前句とのつながりがスムーズではない印象を与えるのである。

『熊野千句』においては、連衆の人数が十の百韻で一定しておらず、すべての百韻での各人の出句の順番がきちんと決まっていたかは不明である。ただ、少なくとも宗匠の心敬は、一巡の中でどこに句を詠むかというところを見た場合、発句から第十句までをランダムに十の百韻で担当し出句している。<sup>23</sup> 勝元も、発句から第十句までを担当する予定であったようだが、第九百韻に至り、まだ担当していない句が第八句で心敬の未担当句とちあつてしまったため、心敬に第八句をゆずり、第十三句を担当している。第十百韻での心敬発句、勝元脇は動かせなかったための措置であろうと思われる。このかちあいがなければ、勝元も発句から第十句までを十の百韻でランダムに担当できた。こうした各人の一巡での出句順の変更が『熊野千句』にはあり、勝元の例から、順に百韻をこなしていく途中で出句順を決めていったとほぼいため、連衆各人は自分の出句順を十回分、把握しており、それぞれに対して句を作っていたわけではなからう。

ただ、第一百韻では、発句を勝元が、脇を興行主の盛長が、第三を連歌を指導する心敬が詠む。この百韻は第一百韻ゆえに連衆の並び順は当然張行前にわかつており、連衆たちも、各自句を用意してきている確率が最も高いであろう。それゆえ、この百韻を見ると、春が発句から第五句まで続いたのち、いったん羈旅の句が付けられ、次いで秋の句（第七句）となる。この第七句から五句秋が続いた後、宗祇によって雑の句がつけられ句境が変えられている。この時、第五句、第六句、第七句の付合は、

五 寒からぬ風にや雪も消ぬらん 行助

六 たく火に旅のやどりとふ暮れ 頼暹

七 分る野の草は(の)むらむら紅葉して 賢秀

であり、第五句まで続いた春に第六句で羈旅が付けられ、第七句では羈旅の意を持ちつつ秋の意も加えて句を付けている。続く第八句で専順が「梢に遠くかかる秋の日」と秋の句に意を限定して続けたため、以後は秋となる。この時、第六句に「旅」、第八句に「秋」とはっきりと部立てを決定する語句が入るのは、句の変化をはっきりさせるためであり、これもあらかじめ作ってきた句が前句にあわなくなるのを防ぎ、目立たせないためであると考えられよう。

『熊野千句』第一百韻のような、発句の季から羈旅へ、そして羈旅・秋の部立に共通する寂しいイメージから、句を変化させていくのが容易な秋へと、句の移りを進めて行くやり方もあり、発句の季の連続が短い場合にはその形が取られやすい。『撫子の』百韻の発句は夏で、三句までしか連続させられない。そこから第五句作者の通賢は羈旅への変化を予測して句作をしてきていたのではないか。もしくは、秋に変わってもよいようにも考えていたのかもしれない。『撫子の』百韻の第七句にも『熊野千句』第一百韻の第七句にも「わくる野」という同じ表現が見られることは、句の順番で展開が或る程度予想されており、第七句の位置ならばこの形といった一つの句形が、各人に共有されていて、用意されたことを示すのではなからうか。

あらかじめ作ってきた句を百韻の中で詠みいれていくために、前句とのつながりが不整合になるのは、『撫子の』百韻』場合、次の付合でも看取できる。

一八 露もひがたき庭の村草 行助

一九 柴運ぶ山下道のかきくもり 光長

一九句は、一六句から秋が三句続いた後の出句であり、秋から雑へと句境を変えているが、前句との間に寄合などのつながりが見いだしがたい。執筆の光長は一句のみ出詠であり、張行中は忙しく、自句を詠み出すのはばかられる立場であるから、句をあらかじめ作ってきており、それをこの部分にあてはめたのであろう。こうした例としては、水辺の句ではあるが、前句との関係が薄く、「舟」の出る根拠がわからない、『寛正六年正月十六日何人百韻』における執筆公範の句もそうだと思われる。

九 岸高く涼しき水のかみどり 宗怡

十 夕べの風に舟ぞよりくる 公範

なお、本来、執筆は連衆の一巡の最後に出句するのが通例であり、『寛正六年正月十六日何人百韻』でもその形を取っている。が、『撫子の』百韻』での一巡の末尾は

一 二 小松か末ぞ草にまじれる 頼宣

であり、光長の出句は一二句から間に六句置いた初折裏の後半になる。これは、頼宣の句に詞の上でも意味の上でも付かず続けられなかったのではないか。頼宣の句を専順が恋にとりなし、恋を三句続けた後、「秋」と「飽き」の掛詞から秋句として三句続け、うらさびしい風情を一八句に呼び込み、光長の句をやつと入れられるようになったのである。

このように見てくると、『撫子の』百韻』からは、張行の場での句の特定に至るまでの様々な過程が連衆と連歌師の関係、連衆の技能などから見えてくるように思われるのである。

この論は科研費基盤研究（C）「中世歌学の享受から見た心敬の文学作品の創造と新撰菟玖波文学圏への影響に関する研究」の成果である。

注

和歌の引用は断らない限り『新編国歌大観』による。

(1) 『撫子の』百韻』は、早稲田大学中央図書館蔵伊地知鐵男文庫蔵『集連』に収められている。『集連』は、早稲田大学資料影印叢書第三十五巻『連歌集（二）』（平成四年十二月・早稲田大学出版部）に写真掲載があり、またインターネット上でも、早稲田大学中央図書館のホームページに画像が公開されている。

(2) 鳥津忠夫氏は「連衆の顔触れや、正月十六日に何人百韻を張行している実中が加わっていることなどから」寛正六年五月の張行と推定される（『鳥津忠夫著作集第四巻心敬と宗祇』（平成一六・和泉書院）第一章一「心敬年譜考証」）。

(3) 金子金治郎『心敬の生活と作品』（昭和五七・桜楓社）。



- (4) 金子金治郎『心敬の生活と作品』（昭和五七・桜楓社）。
- (5) 『草根集』の引用は、『新編私家集大成』所収日次本（書陵部蔵御所本）による。
- (6) 『釈教歌詠全集第四卷』（昭和五三復刻版・東方出版）所収。
- (7) 『釈教歌詠全集第三卷』（昭和五三復刻版・東方出版）所収。
- (8) 引用は『連歌論集三』（昭和六〇・三弥井書店）による。
- (9) 『親当句集』（七賢時代連歌句集）（昭和五〇・角川書店 所収赤木文庫本）「二月廿五日細川殿の御千句に」（六三番句詞書）とある。なお、『細川千句』については鶴崎裕雄『戦国の権力と寄合の文芸』第三章第一節「細川千句」と管領細川氏（昭和六三・和泉書院）がある。
- (10) 引用は『連歌論集三』（昭和六〇・三弥井書店）による。
- (11) 『所々返答』は年次不記であるが、金子金治郎『心敬の生活と作品』（昭和五七・桜楓社）は、勝元から政長へ管領移譲が行なわれた寛正五年九月の翌春の話と見て、寛正六年春としており、それに従う。
- (12) 『連歌論集三』（昭和六〇・三弥井書店）木藤氏頭注による。「管領勝元」と書かれているところから、勝元が管領の職にあった寛正五年九月以前のことと推定されている。
- (13) 木藤才藏『連歌史論考上増補改訂版』（平成五・明治書院）第七章二の3「専順」四一六頁に推定されている。
- (14) 金子金治郎氏は「連歌界における心敬の位置について」、「將軍家などの晴れの会に加わること、きわめて少なく、畠山・細川の両管領家をめぐる会を主とし、これに行助・専順らの地下連歌師と交ること、主要な舞台であったようである」（『心敬の生活と作品』（昭和五七・桜楓社）とされている。
- (15) 引用は『京都大学蔵貴重連歌資料集2』（平成一五・臨川書店）による。
- (16) 『連歌貴重文献集成第三集』（昭和五六・勉誠社）所収「百一連珠（専順宗祇百句付）」解説（湯之上早苗氏）には、「京兆」ならば細川勝元あたりが有力者であるが、これは「源」姓である。くしばらく「不審」としておく」とある。
- (17) 細川氏の家臣たちの経歴等については、廣木一人「讃州安富氏の文芸―熊野法楽千句のことなど―」（『文化財協会報』特別号・平成十一・三）、鶴崎裕雄「寛正四年三月廿七日賦何船連歌と管領細川勝元」（『中世文学』第五十号・平成十七）などに述べられている。

(18) 宗硯『北野会所連歌始以来発句』（『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）の文安六年八月七日条（第三三句詞書）。

(19) 『熊野千句』の伝本は古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収静嘉堂文庫本による。

(20) 『寛正六年正月十六日何人百韻』の伝本は、大阪天満宮文庫蔵長松本による。

(21) 『寛正七年二月四日何人百韻』の伝本は、大阪天満宮文庫蔵長松本による。

(22) 心敬の『私用抄』に、

一、春秋を面に五句めまで沙汰候。春の句などの五句めまで待れば、ことのほかくたびれたる句ども見え侍て、恥ぢがましく哉。春句はあたたかにて付けにくき物歟。三句目までなれば、うらの季もはやく移りてあそばしよく侍る歟。

と述べている。この点についての考察は伊藤伸江・奥田勲「本能寺蔵『落葉百韻』訳注（六）付考察及び式目表」（『愛知県立大学説林』第六〇号・平成二四・三）でなした。

(23) 心敬、勝元、専順、行助、宗祇及び、比較として第六百韻で発句を詠む元綱の各百韻での出句順をあげておく。例えば③は、第三句目に初めて出句したことを示す。専順や行助が初折表の末尾である第八句に何度も入っていることは、彼らが滞る出句を助けるために句の流れの変化しそうな部分で助けていることを示そう。また、それゆえ、この千句では全ての百韻での出句順が厳密に決まっていたとは考えられず、後の方の百韻になると発句からせいぜい第三あたりまでしか決まっていなかったのではなからうか。

百韻	心敬	勝元	専順	行助	宗祇	元綱
一	③	①	⑧	⑤	⑫	⑮
二	⑤	③	⑥	⑦	⑧	②
三	⑥	④	⑤	⑧	⑨	⑩
四	④	⑤	⑮	③	⑦	⑬
五	⑨	⑦	③	⑥	④	⑱
六	⑩	⑥	④	⑧	③	①
七	⑦	⑨	⑧	①	⑮	無
八	②	⑩	⑪	④	⑤	⑱
九	⑧	⑬	①	⑫	⑥	⑪
十	①	②	⑦	⑪	⑥	⑫

(24) 例えば心敬の『私用抄』では、執筆について次のように述べる。

一、執筆 最大事の役に侍れば、わが句を申、見にくく哉。大むね、二、三句計敷。わが句を申さんとするゆへに、誤りおほく出  
でき侍る敷。(後略)

一、筆など、初めよりはつるまで、下に置くべからず。外様の席などに座を立つことあるべからず。(後略)

## 「撫子の」初何百韻式目表

句番号・作者	春	夏	秋	冬	恋・衣類	雑(述懐)	旅名所	神祇 釈教	山類 水辺	居所 人倫	動物 植物	光物 時分	聲物 降物	花月	
1 勝元		夏									植	降			初折表
2 専順		夏									植				
3 心敬		夏							山水		動(鳥)				
4 実中			秋						水			夜		月	
5 通賢												夜			
6 行助			秋				旅					夜			
7 元説			秋				旅			居					
8 宗祇			秋									光(日)	登		
9 盛長				冬							動(鳥)		降		初折裏 一巡終了
10 常安					恋				山						
11 宗怡			秋		恋										
12 頼宣						雑					植				
13 専順					恋										
14 心敬					恋							暮			
15 勝元						雑				人					
16 通賢			秋							居					
17 宗祇			秋									光		月	
18 行助			秋							居	植		降		
19 光長						雑			山		植				
20 実中						雑					植				
21 元説			秋							居		光(日)			
22 盛長						雑			水						
23 心敬						雑			水体用	人					二折表
24 専順						雑			水		植				
25 常安								釈							
26 宗祇						雑									
27 盛長						雑				居					
28 行助			秋		衣						植	夜光		月	
29 専順			秋		衣										
30 心敬			秋										露		
31 実中			秋								植				
32 勝元	春										植			花	
33 頼宣	春														
34 心敬						述懐									
35 ? (行助か)						雑									
36 宗祇					恋							夜			
37 元説					恋							夜			二折裏
38 勝元					恋							夜			
39 行助						雑				人					
40 頼宣						雑			山体用						
41 常安						雑			水	居					
42 元説						雑			水	居					
43 専順				冬							植				
44 通賢						賀									
45 心敬			秋									光		月	
46 宗怡			秋									夜			
47 勝元			秋						山		動				
48 宗祇						雑	名		山	居					
49 盛長				冬							植				
50 実中				冬	衣								降		
51 心敬				冬									降		三折表
52 宗祇					恋										
53 専順					恋										
54 行助					恋					人					
55 通賢					恋										
56 常安	春								山		動(鳥)				
57 勝元	春										植			花	
58 ? (心敬か)	春										植				

